

# 人間的労働の経済学的考察（五）

山本二三丸

はしがき

一 人間的労働の基本的意味 ……………（以上、第十四卷第四号所載）

二 本来的私的所有のもとの人間的労働

(1) 本来的私的所有の意味

(2) 社会的富の規定

(一)

(二)

(三)

(3) 商品生産における労働の二面性……………（以上、第十五卷第三号所載）

(4) 私的労働の社会的性格……………（以上、第十五卷第四号所載）

(5) 労働の対象化……………（以上、第十六卷第一号所載）

(6) 価値法則……………（以下、次号所載予定）

(7) 所有法則（交換の法則）

(8) 価値の自立化

(6) 発展法則

三 人間的労働力の商立化

人間的労働の経済学的考察（五）

- 四 資本制的私的所有のもとの人間的労働
- 五 社会的所有のもとの人間的労働

## 二 本来的私的所有のもとの人間的労働

### (4) 私的労働の社会的性格

(一)

さきに本稿の第一章「人間的労働の基本的意味」のうちの「(6) 労働の社会的性格」において簡単に考察したように、社会の成員個人がたがいに自然的紐帯により、あるいはまた人身的隷属関係によって結びつけられているときには、それらの成員個人は、はじめから社会的総労働力の一分子を担うものとしてあり、したがって成員個人の労働ははじめから社会的総労働を構成するものとしてあるのであって、かれらの個人的労働力の支出たる個人的労働そのものが、その具体的形態において直接に社会的労働となっているのである。いいかえれば、ここでは、労働の特殊・具体的な形態すなわち具体的労働そのものが、直接に労働の社会的形態となっているのであり、またその逆に、具体的形態においてのみ、労働は社会的労働を形成するものとなっているのである。ところが、これにたいして、私的所有の社会では、社会の成員個人はたがいに独立し、「自由・平等」の關係にあって、個人相互のあいだにはなんらの人間的結びつきも存しない。かれらは、めいめいばらばらに自分勝手な行動をし、各個人が社会的総労働力の一分子を担うものとして意識的・計画的にその個人的労働力を支出するということはない。各成員個人は私的生産者で

あつて、かれらの労働力は直接には私的労働力としてあり、かれらの労働はあくまでも私的労働であるにすぎない。だが、これらの私的生産者の私的労働が最後まで私的労働としてとどまるかぎり、この社会には社会的労働というものはいっさい存在しないことになり、したがつて社会の存続そのものもおぼつかないこととならざるをえない。社会的労働によつてのみ社会の存続が保証されるのに、この社会では、労働はすべて私的労働という形においておこなわれ、私的労働以外には他のいかなる労働もこの社会には存在しないということになっている。およそ社会の存続を前提とするかぎり、いいかえれば、われわれがとりあげて考察しなければならぬのは存続できないような社会ではなく、存続し発展する社会だけであることを考慮にいれるならば、いっさいの労働が直接には私的労働という形においておこなわれている私的所有の社会においては、この私的労働以外に社会的労働となりうるようなものはない、つまり、私的労働そのものが、なんらかの関係において社会的労働になる (werden) 以外に途はない、ということがわかる。すなわち、ここで当然に問題となつてくるのは、私的所有にもとづく社会において直接に私的労働としておこなわれる各私的生産者の労働が、どのような関係において、また、どのような形態をとることによつて、社会的労働になるか、ということである。

まず、私的生産者が、その私有する生産手段をもつて、かれ自身の担っている労働力を支出して労働をおこなうばあい、この個別化された個々人の労働は、その独立生産者の私的計算においてのみなされるのであつて、けつして社会的総労働の一分子を構成するものとしておこなわれるものではない。その労働は、その個別的な私的生産者がもつばらかれ個人の私的的目的にそつて、特定の形態で労働力を支出するものであつて、その具体的形態は、他のすべての私的生産者のおこなう労働の特定の具体的形態と同一であるということはありえないし、また、それらと共通の性質

をもつものではない。個別的生産者の労働の具体的諸形態が千差万別であるところに、私的所有と自然發生的な社会的分業のもとでの生産のひとつの特徴が存するのである、それゆえ、個別的生産者がそれぞれ特定の形態においてかれら自身の労働力を支出するという点においては、その労働は、なら社会的労働としての性格をもつものではない。では、労働の他の一面、すなわち、抽象的・人間的労働の面については、どうであるか？

私的生産者の個別的労働は、かれの私的計算で、かれ個人の目的に合致した特定の形態をとっておこなわれ、そのかぎりでは他の生産者の個別的労働とはなら共通するところはないが、しかし、これらの私的生産者の個別的労働は、その反面において、かならず、人間的労働力一般の支出という意味での抽象的・人間的労働という、共通の一面をもっている。つまり、この社会では、すべての私的生産者の個人的労働は、その具体的形態においてはいづれもはなはだしく相違しており、その間になんら共通するものをもたないが、抽象的一般性という形態においてはすべて共通のものであり、同じ抽象的・人間的労働をあらわすものとなっている。この社会における労働は、そのすべてが私的・個別的労働であり、それらいっさいの個別的労働は、抽象的・人間的労働という面ではいづれも共通の性格をもつものとなっているがゆえに、この共通の性格をもつものがまさしくこの社会における社会を支える労働であり、かくして、これらの個別的労働は、抽象的・人間的労働という、さきの具体的労働におけるとはまさに正反對の、抽象的一般性という形態をとることによって、いいかえれば、抽象的・人間的労働という資格においてのみ、はじめて社会的なものとなることができるし、また、その点において社会的なものとならなければならないのである。

以上みてきたように、他の諸社会——たとえば家父長制的社会——においては、社会の成員個人の労働は、その具体的形態において、特殊な具体的労働の面において直接に社会的労働としての性格をもつものでなければならない

が、私的所有にもとづく社会にあっては、これと正反対に、抽象的・人間的労働という一般性において社会的労働としての性格をもつものでなければならぬ。だが、この場合、いづれの社会でも、個々人の労働は、具体的労働と抽象的労働との二面をもっているものであって、共同的社会での成員個人の労働はその具体的形態の面についてみて社会的労働であり、私的所有の社会ではその個人的労働の抽象的一般性についてみて社会的労働である、というように論を立てることも、あながち誤りとはいえないようにも考えられる。このような議論は、労働について、たんに労働力を流動させつつある過程としての労働の面だけをとりあげて、共同的社会ならばその流動そのものの、いいかえれば労働力の支出における具体的形態について、私的所有ならばその抽象的一般性について、いづれも社会的労働であるというように主張するものであって、結局、両社会において個人的労働はそのまま、いづれも社会的労働としての資格をもつものだということを主張することになるものである。

だが、人間的労働力を流動させつつある過程、つまり労働そのものについて、ただちにそれが社会的労働であるとしてとらえることがはたしてできるかどうか？——この点に重大な問題がひそんでいることを見逃してはならない。共同的社会のばあいには、個々人は、その担っている労働力の支出をおこなう以前に、つまり、その労働力の担い手自身の存在そのものにおいて、すでに総労働力を構成する一分子として社会的労働力の担い手であり、このような一分子として社会的総労働の一肢体として配置されているのであって、その労働力の流動そのものが——その流動の具体的形態において、しかも直接に——社会的労働でなければならないのである。ところが、私的所有のばあいには、事態はけっして右のようにはなっていない。むしろ、正反対ともいえるべきものである。私的生産者の労働力の支出、つまり労働そのものは、かれ個人の個別的意思によるまったくの私的行為であって、その労働力の担い手自身について

ても、労働力の流動そのものについても、そのかぎりでは、他の成員とのあいだに、他の成員の労働とのあいだに、なんら直接関係するところはないのである。簡単にいえば、はじめからおわりまで私的個人が自分勝手にその労働力を流動させつつあるだけで、そのような私的行為がはたして社会的なものとしての性格をもつかどうかは、そのままでは——つまり、労働力を流動させつつある過程そのものについてみたときには——絶対にとらえることはできないし、また、社会的なものだということはできない。正確にいうならば、そのかぎりでは社会的なものではないのである。たとえ、ある第三者がはたから観察して、抽象的労働の面においては他の成員個人の労働力支出とまったく共通の資格をもつものだとということも認めたとしても、それでは、ちようど、それぞれ別々に自足的生産を営んでいて経済的にはたがいになんらの関係もたない二人の個別的生産者についてその労働をとりあげ、両者の労働はいづれも抽象的労働という面をひとしく——つまり、共通に——もっているから両者の労働のいづれも社会的労働であるのだと主張するのと同じたぐいのものであって、誤った個人的主観的判断におちいることになる。社会的である、ということとは、たんにそれぞれの個人的労働が共通の性格をもっているというだけではけっして云えない。（むしろ、その反対に、共同的社会のばあいのように、共通の性格にもとづかなくとも、りっぱに社会的労働であることもできるのである。）個人的労働が社会的労働であることは、それぞれの労働がともに一つの社会を支える総労働の一分子を成しているということが、いかえれば、個別的労働相互のあいだの関連が存在しているということが、示されなければならぬ。肝腎の点は、この関連が、たんに観察者の観念の中に存在するだけというものではなくして、客観的に現実

に、社会的過程として存在し、しかもその存在がまた客観的に、なんらかの形で事実示されるものでなければならぬ。い。（このような客観的な社会的過程が、共同的社会のばあいには、直接に労働力の流動の具体的形態そのもの、い

いかえれば、社会的総労働の一分子としての具体的労働そのもの、であるのである。(私的所有のもとの私的生産者の個別的労働そのものが、その労働力の流動そのものにおいて、なんらかの意味において社会的性格をもちうるものでないことは、明瞭である。さきに挙げた抽象的一般性という共通の性格についても、それがたんに観察者の觀念の中にあるだけのものでなく、そのような共通な性格をもつものとして客観的に示され、またそのようなものとして相互に関連をもつものであり、また関連をもつことが示されるものでなければならぬ。

このようにみえてくると、私的所有のもとにおける私的生産者の個別的労働が、その「労働力の流動」そのものにおいては、つまり「生きた労働」そのままでは、あくまでも個別的、私的労働であるにとどまって、なんらの社会的性格をももたないということ、それにもかかわらずそれが社会的労働に成ら (werden) なければならぬとするならば、どうしても「生きた労働」ではなくてその対象化した形態における労働について、右に述べた社会的性格がとらえられると同時に実証されなければならないということ、したがってまた、さきに挙げた労働の抽象的一般性も、その対象化した形態においてのみ社会的に問題とならねばならぬということが、あきらかに推論されるのである。私的所有のもとの労働が社会的労働と成るのは、実にその対象化した形態をとったばあいのみであり、しかもこの対象化した形態についてのみ実証されるのである。商品の交換過程は、まさに右のような私的労働の社会的性格が顕現すると同時に実証される唯一の客観的過程であり、かくして私的労働が社会的労働に現実になる (werden) 過程でもあるが、この交換過程の真の意味を正しくくみとるためには、対象化した形態のみが決定的意義をもつものだという、私的所有のもとの人間の労働のきわめて重要な側面をしかと把握しておく必要があるのである。

われわれは、つぎの節において、右の「対象化」の問題を論究するが、それにさきだって、本節で検討した「私的

「労働の社会的性格」の問題に関連して、きわめて特異な「私的労働と社会的労働との二重性」を説いている宇野氏の所論をここに吟味しておくことが、問題の内容をその十分な広がりや深さにおいてとらえるためにきわめて適切なものと考えられるので、節をあらためてすこしく検討を加えてみることにしよう。

(一)

はじめに「私的労働と社会的労働との二重性」について宇野氏の説いている箇所をその原著『価値論』の中から引用してかかげ、ついで、これまでと同じように、各パラグラフごとに吟味を加え、最後に簡単なしめくりをするにとしよう。

「人間が自然に働きかけて生活に必要な物資を獲得するということは、人間と物との間の関係として見れば、何の特に問題とすべき点はない。そしてそのことは物を決して人間にとって商品たらしめるものではない。此の場合にも『平均的に要する労働時間』が、各種の物に対してそれぞれ一定の比較計量の基準を与えることから、人間にとってその物が有する『価値』と看做してもよいわけであるが、それは明かに人間の一定の労働を要したものである『価値』であって、之を直ちに商品の『価値』とするわけにはゆかない。勿論、商品も労働の生産物として、人間の自然に対する此の関係を離れてあるわけではない。しかし労働生産物が商品となるときには、人間は単に自然に対して働きかけるというだけでなく、それによって人間相互間にも一定の特殊の関係を形成する。ロビンソンが『彼れの活動の全体』を種々なる有用労働に配分したと同様のことを、商品社会全体に於いてしなければならぬ。それと同時にロビンソンでは単に彼れと自然との間の関係として、物の生産に『平均的に要する労働時間』として、彼れ自身の労働の配分としてあらわれたものが、社会的に各人の労働として配分せられなければならない。ロビンソン一個人の労働の配分であれば問題にならないが、社会各人の労働には、それが如何にして配分せられるかは、問題とならざるを得ないのである。それは最早や物の生産に『平均的に要する労働時間』によって、物自身が個々の人間にとって有する『価値』とは云えないものに転化して来る。人間の物に対する関係が、その生産に『平均的に要する労働時間』が、各人の労働の社会的に要する労働時間に転化する。それは『本質的規定』としては何等異るところのないものであるが、その現われ方は個人的なるものが社会的なるも



のに転化しなければならぬ点で全く異つたものになつて来る。『商品世界の価値の総和の内に表現せられる社会の総労働力は、無数の個人的労働力から成るとは云え、此処では一個同一なる人間の労働力と看做される』というのも、その意味である。それは決してロビンソンの場合のように『一個同一なる人間の労働力』ではないが斯かるものと『看做される』のである。そこに商品に特有な現われ方があるのである。

マルクスが『資本論』第一巻第二章第二節で明かにしている『商品に表現せられた労働の二重性』も、したがって此の観点から理解しなければならぬ。それは單純に所謂有用労働と抽象的な人間労働との二面の対比としてではなく、寧ろ此の二面が商品生産に於いて特殊の形を採つて対立的なものとしてあらわれる点に注意しなければならない。

元來商品の使用価値は、商品の生産者乃至所有者にとつての使用価値ではない。したがつて使用価値を生産するものとしての労働自身が己にロビンソンの場合とは異つた性質をするものとも云えるのである。その有用労働は、商品に於いては抽象的な人間労働とそのまま結合せられたものとしてではなく、寧ろ同じ労働が、一面では己に他人の爲めの有用労働として、他面では他人の有用労働に於いて実現せらるべき自己の人間の労働として、互に対立的な關係にあり乍ら統一せられたものになつて居る。極言すれば有用労働自身は、その労働の担当者にとつて直接關心をもつたものとは云えないものとしてあらわれるのである。ロビンソンの場合には彼れの労働時間の配分が『必要に迫られて』なされたのに反して、此処ではその有用労働への分業が『必要に迫られて』なされるのである。『物が無用であれば、その内に含まれている労働も亦無用であり、それは労働としても数えられず、したがつて又何等の価値をも形成しない』からである。

『上衣にとつては、それが裁縫師によつて着られるか、裁縫師の顧客によつて着られるかは、何れにしても同じである。双方共上衣は使用価値として作用する』。それは上衣が己に裁縫師にとつてもその顧客にとつてと同様に己に商品としてではなく、使用価値としてあるからである。勿論、『上衣とそれを生産する労働との關係自身は、裁縫が特殊の一職業となり、社会的分業の獨立の一部となつたからといって、何等変化するところはない。衣服を着けたいという欲望に迫られれば、人間は、その一人が裁縫師になる以前に、すでに数千前に亘つて裁縫して来た』のであつて、その点では、斯くの如く『特殊の自然素材を特殊の人間欲望に適合せしめる、一定の目的に従つて行われる特定の生産的活動』は、『有らゆる社会形態から獨立した、人類生存上の一条件であり、人間と自然との間の代謝機能を、即ち人間生活を媒介すべき永久的の自然必然事である』と云るのであるが、しかし商品に於いては、『衣服を着けたいという欲望』自身が、己にその生産者によつて直接、個人的にもたれるといふのでなく、社会的に、

他の物の生産者乃至所有者によつてもたれるものとなつて居るのである。

直接の生産者自身にとつては、事実上有用労働としての個々の具体的生産活動に従事し乍ら、それが裁縫労働であるが、機織労働であるかは問題ではない。それ丁度『同一の人間が裁縫したり、機織したりして、この二つの労働の方法が同一個人の労働の變形に過ぎない』ものとして、何れにも同一の人間労働が支出されたと考えられるのと同じ事を、社会的に行うのである。現に『資本主義社会では、労働需要の方向の変化に従つて、人間労働の一定部分が、或る時は裁縫の形で、又或る時は機織の形で供給されている』。それは生産者自身にとつては、その生産活動が、己にその具体的形態を捨象した形であらわれて居ることを示すのである。勿論、此等の生産者の労働は、それが為めに直ちに社会的な労働となるわけではない。その人間の労働の支出は、依然としてその生産者自身の個別的なるものに過ぎないのであつて、彼れの労働の五時間が、直ちに社会的にも五時間の人間労働の支出と認められるわけではない。云い換えれば、商品の価値を形成する労働は、そのまま比較計量せられるわけにはゆかないのである。それは『個人的労働力の各々が、社会的平均労働力の性質を有し、且つ又斯かる社会的平均労働力として作用し、したがつて又一商品の生産にも、平均的に必要な、即ち社会的に必要な労働時間を要するに過ぎない場合に限つて他のものと同じように同一の人間の労働力』とせられる外はないのであつて、社会的過程を通して始めて計量せられ得るものとなるのである。それは『社会的に標準をなす生産条件と労働の熟練及び能率の社会的平均程度とを以て、何等かの使用価値を生産するに必要な労働時間』として計量せられるのであつて、直接的には、即ち具体的な労働を個別的になすに過ぎないものにとつては、云わば外部から与えられる計量となるのである。

要するに商品生産をなす労働は、その労働の有用労働と抽象労働との二面を、私的労働と社会的労働との二重性としての対立に転化するのである。したがつてマルクスが『有らゆる労働は、一方では、生理的意味に於ける人間労働力の支出であり、又此の等一なる、人間的なる、即ち抽象的人間労働という性質に於いて商品価値を形成する。有らゆる労働は、他方では、目的の一定した、特殊の形態に於ける人間労働力の支出であり、又此の具体的なる、有用労働の性質に於いて使用価値を生産する』という時、吾々は之を單純に『抽象的人間労働』と『具体的なる有用労働』との二重性と解してしまつてよいとは云えない。マルクスにとつても、前者が商品価値を形成するものとしてあらわれる点にその意義があつたものと認めなければならない。それと同時に使用価値を生産する労働も單なる有用労働とは云えないものになつて来るものと理解されるのである。實際又先きに引いたマルクスのロビンソンの例に於いても、又『共同の生産手段をもつて労働し、且つ又その多くの個人的労働力を意識的に一の社会的労働力として

支出する自由なる人間の団体』に於いても、此の『抽象的人間労働』と『具体的なる有用労働』とは、商品生産に於けるような對抗的性質を有するものとは云えない』（前出、一〇六一—一〇六二ページ、ゴシック体一山本）。

まず、第一パラグラフについて。そのはじめから、第四の「勿論、商品も労働の生産物として、人間の自然に對する此の關係を離れてあるわけではない」というくだりまでは、自明のことを述べていて、一応問題はなないように見える。もちろん、この部分は、それにつづく特異な主張の前置きとしてあり、したがって、一見自明と見えることも、氏独特の特異な意味を与えられたものとして置かれているはずであるが、当面さして重要な意義をもつことでもないので、この部分についてたちいることをさけ、そのつぎの文章からとりあげて検討することにしよう。

①「しかし労働生産物が商品となるときには、人間は単に自然に對して働きかけるといっただけでなく、それによって人間相互間にも一定の特殊の關係を形成する」。

この文章も一見自明のことを述べているようにみえるが、しかしすこし注意して読むときには、きわめて問題あるものであることがわかる。まず、「それによって」というばあいの「それ」が何を指すか、この論者のいつもの伝でしかとらえにくいのが、しかし、それに先きだつものとしては、「労働生産物が商品となる」と「人間は自然に對して働きかける」との二つしかなく、したがって、そのうちのいずれかでなければならぬということとはあきらかである。そのいずれを指すにせよ、「それによつて人間相互間にも一定の特殊の關係を形成する」というのは、完全に誤りであり、厳密にいえば、逆立ちした論法といわなければならぬ。「人間相互間」というのは、いうまでもなく、「人間と人間とのあいだの關係」ということであつて、このばあい、商品あるいは「自然にたいする働きかけ」を媒介としない人間と人間との直接的な關係を指すものだということは、疑いをいれない。ところで、科学的理論にした

例えば、「労働生産物が商品になる」のは、そもそも「人間相互間に一定の特殊の関係」がすでに存在しているからである。「それによって」はまさに逆であって、「人間相互間に一定の特殊の関係がすでに存在する」ときに、その「人間相互間の関係」によつてはじめて「労働生産物が商品となる」のである。こういう明白な誤りをおかしてまで、あえて論者が「人間相互間にも一定の特殊の関係を形成する」と主張しているのは、この「人間相互間の関係」なるものについて、きわめて相異なる意味を考えているものだと示していることになる。この「人間相互間の一定の特殊の関係」なるものは、行論において論者自身が述べているように、「私的労働と社会的労働との二重性」というようなことをその中心としているものであるが、このような「関係」は、論者自身明白に述べているように、「商品を媒介とする関係」であつて、むしろ商品そのものの「特殊な性格」ともいふべきものであり、かつして「人間相互間の特殊の関係」そのものではありえない。このように「特殊な意味」をもつものとして不当に拡張解釈を施しても、「労働生産物が商品となる」ときには、……それによつて人間相互間にも一定の特殊の関係を形成する」というのは誤りであつて、正しくは、「労働生産物が商品となる」ということは、人間相互間の関係が一定の特殊の関係としてあらわれることを意味する」といふべきなのである。だが、この点についてのたゞいした論究は、行論にゆづることによつてしよう。

②「ロビンソンが『彼れの活動の全体』を種々なる有用労働に配分したと同様のことを商品社会全体に於いてしなければならぬ。それと同時にロビンソンでは単に彼れと自然との間の関係として、物の生産に『平均的に要する労働時間』として、彼れ自身の労働の配分としてあらわれたものが、社会的に各人の労働として配分せられなければならない。ロビンソン一個人の労働の配分であれば問題にならないが、社会各人の労働には、それが如何にして配分せ

られるかは、問題とならざるをえないのである」。

「ロビンソンが『彼れの活動の全体』を種々なる有用労働に配分したと同様」に、共同社会であれ商品社会であれ、およそ社会として存続するかぎり、おこなわれねばならない、つまり、「どんな社会も『社会の自由にしうる総労働』を種々なる有用労働に配分しなければならぬ」のである。だから、この論者がその前文において、「労働生産物が商品となるときには」という限定をつけているのは、まったく誤りであり、また、「同様のこと」という言葉の真の意味を考えないでこれを使っているものだとわがわがわかる。「社会」は「ロビンソン」とちがって多数の成員個人から成り立っており、したがってロビンソンのばあいの「彼れの活動の全体」は、社会のばあいには、「社会成員全体の活動の全体」ということになり、ロビンソンのばあいの「個人的総労働時間のかれ個人のおこなう各種有用労働への配分」ということは、社会のばあいには、当然、「社会的総労働時間の各成員のおこなう有用労働への配分」ということになる。そして、ロビンソンのばあいには、一個同一の人間の担っている同一種類——同一品質——の労働力の支出として、その総労働時間の配分のさいに労働の質は問題となりえなかつたのにたいして、社会のばあいには、無数の、しかも「品質」のそれぞれ異なつた個人的労働力によって総労働およびその配分がおこなわれなければならないために、ここでは、これら千差万別の質の労働力の支出を、一個同一の等質の労働力の支出としてとらえるためには、——そしてまた、一個同一の等質の労働力の支出として社会的に妥当するためには、——ここに「平均的に要する労働時間」すなわち「社会的平均的労働力への還元」が必要不可欠のものとなる。「平均的に要する労働時間」すなわち「社会的平均的労働力への還元」をのぞいては、社会的総労働の「種々なる有用労働への配分」は、まったく成り立ちえないのであって、「種々なる有用労働への社会的総労働の配分」そのものの中に、すでに

「平均的に要する労働時間」いいかえれば「社会的平均的労働力への還元」は本来その不可欠の一要素として含まれているのである。それゆえ、第一に、この論者が、ここで「それと同時に」と云っているのは、きわめて混乱した理解を示すもので、誤りというべきである。第二に、「物の生産に『平均的に要する労働時間』として、彼れ自身の労働の配分としてあらわれたもの」という言葉が、救いたい混乱と誤解とを示しているものといわなければならない。ロビンソンのばあいの「平均的に要する労働時間」とは、ロビンソン個人の労働力の支出の質についての規定を示したものであって、それが一個同一の労働力の支出として同じ質のものであるという点が肝要なのである。これを第一パラグラフのはじめに論者が述べているように「比較計量の基準」として量的なものとらえるのは誤りである。ところで、一個同一の人間労働力の支出として労働時間が現実の問題となつているときに、『平均的に要する労働時間』としてあらわれたもの」というようなものがどこにあるであろうか？ また、論者は、ここで、「物の生産に『平均的に要する労働時間』としてあらわれたもの」と「彼れ自身の労働の配分としてあらわれたもの」とをまったく同じものとして並べて書いているが、「配分」と「労働時間」とがまったく異なるものであることはきわめて明白であつて、この同一視はあきらかに混乱を示すものといふのほかない。いったい、「労働の配分としてあらわれたもの」などというものがあつてあるであろうか？ 第三に、最後の文章でこの論者が「それがいかにして配分せられるかは、問題とならざるを得ない」と述べていることは、まことに奇妙である。すでに前文において、「ロビンソンが『彼れの活動の全体』を種々なる有用労働に配分したと同様のことを、商品社会全体に於いてしなければならない」とはつきり述べたてている。だから、「それがいかにして配分せられるか」は、右の「同様のこと」という簡単な言葉によつて明示されているのであつて、要するに、さきに説明したように、ロビンソンが個人的にとりおこなつたところ

を社会は社会的にとりおこなうだけである。それにもかかわらず、この論者がここでもっともらしく「それがいかにして配分せられるかは、問題とならざるをえないのである」などと述べたてているのであるから、この論者がはたして右の「同様のこと」という簡単な言葉の意味を理解してつかったものであるかどうかは、すこぶる「問題とならざるをえないのである」。ここで論者が「個人的に」と「社会的に」との二つの言葉の内容についてまったく理解するところがないということは、問題なくあきららかである。

③「それは最早や物の生産に『平均的に要する労働時間』によって、物自身が個々の人間にとって有する『価値』とは云えないものに転化して来る。人間の物に対する関係が、その生産に『平均的に要する労働時間』が、各人の労働の社会的に要する労働時間に転化する。それは『本質的規定』としては何等異るところのないものであるが、その現われ方は個人的なるものが社会的なるものに転化しなければならぬ点で全く異ったものになって来る」。

まず、はじめの「それは」という、代名詞に注意されたい。この「それ」が何を指すかは、おそらく著者を除いてこれをはっきり指摘できるものは誰ひとりとしてないであろう。このような曖昧な、ルーズな語法そのものが、すでに論者自身の論理そのものの曖昧さとルーズさととの端的なあらわれである。前後の関係から想像するに、おそらくこの「それ」は「平均的に要する労働時間」を以ては、それに該当するものは見出しがたいであろう。ところで、問題は、ロビンソン個人から社会全体にうつっているのである。したがって、話は「物自身が個々の人間にとって有する『価値』と云えるもの」から、「そうは云えない」ものにつらざるをえないこと、つまり、「物自身が個々の人間にとってではなく社会にとって有する括弧つきの『価値』と云うべきもの」にうつらざるをえないことは、自明である。このばあい、「転化して来る」という言葉は、同じく論者の混乱と誤解を示すだけのものである。要する

に、ここでは、さきの個人にとっての「平均的に要する労働時間」が、社会全体にとっての「平均的に要する労働時間」に当然変っただけである。もし、このばあい、「個々の人間にとって有する『価値』」という点に重心をおいて事態を観察するならば、問題が個人から社会全体に移ることによって、個人のばあいの「個々の人間にとって有する『価値』とも云うべきもの」そのものがどのような社会的意義をもつようになるか（あるいは、なったか）ということこそが、もっとも肝腎な事柄となる。つまり、「物自身が個々の人間にとって有する『価値』」なるものがどのような形をとって意義をもちつづけるかということが問題となるのであって、『『価値』』とは云えないものに転化して来る」などということははじめから問題とはならない。だが、この論者の論法のまことに手のこんでいるところというのは、ここでも、「人間の物に対する関係が」という一句をつぎの文章の冒頭に挿入することによって、『『価値』』とは云えないものに転化して来る」という右の文句の「云えないもの」と「転化して来る」とを同時に「援護」しているという点に示されている。このように手のこんだ論法はかえって馬脚を示すことになるのであって、そのために、右のつぎの文章では、「人間の物に対する関係」が「社会的に要する労働時間」に「転化する」という「芸当」を演じなければならぬ破目となっているのである。いったい、「関係」がいつ、どのようにして、「必要労働時間」に「転化」するのであるか？ そもそも「関係」と「労働時間」とは、いつから、どうして同じものになったのであるか!? もし、右の文章から「人間の物に対する関係が」という、挿入句をあっさり削りとってしまえば、さきほど説明したように、個人にとっての「平均的に要する労働時間」なるものは、社会全体についてみれば当然に「社会的に必要な労働時間」ということになるという、しごくあたりまえのことにしかならないのである。つまり、このように当り前のことを述べていたのでは、論者の特異な——つまり、当り前でない——主張はとうてい読者に納得され



がたい。そこで、当り前でない内容を盛るために、はじめに「人間の物に対する関係が」という一句がむりやりくっつけられ、最後に「転化する」という一語が同じくくっつけられたものである。

最後の文章の「それ」は相かわらず、アイマイにしてルーズなものであるが、これもおそらく「平均的に要する労働時間」ということであろう。この最後の文章も、それまでの各文章で並べたてられた屁理窟——つまり、混乱と誤解の結合物——をくりかえし述べたまでのことである。第一に、「その現われ方」などは、はじめから問題とはなっていない。さきにあるのは個人にとっての「平均的に要する労働時間」であり、あとにあるのは社会にとっての「平均的に要する労働時間」である。ここには「現われる」ものはないのである。第二に、「転化しなければならぬ」ものなど、なにひとつとしてない。話が個人から社会にうつったのである。つまり「移った」という意味で「転化した」のは、話であり、問題そのものである。話が個人から社会にうつったのであるから、個人のばあいの「平均的に要する労働時間」は、社会のばあいには当然に「社会的平均的に要する労働時間」にその場所をゆづらざるをえないというだけのことである。要するに、ロビンソン一個人についての事柄と社会全体についての事柄とを並べてみたとき、前者において個人的におこなわれていたことが後者では社会的におこなわれることになったというだけのことであって、ここでの問題は同じ事柄が後者において社会的な形をとっておこなわれるという点にあるのである。それは、この論者のくりかえし述べたてているように、事柄そのものが、「社会的なものに転化した」などということではけっしてないのである。この点からみてもすでに、この論者が、「個人的」「社会的」という単語についてきわめて特異な解釈を有していることがうかがわれるのである。

④ 『商品世界の価値の総和の内に表現せられる社会の総労働力は、無数の個人的労働力から成るとは云え、此処

では「一個同一なる人間の労働力と看做される」というのも、その意味である。それは決してロビンソンの場合のように『一個同一なる人間の労働力』ではないが、斯かるものと『見做される』のである。そこに商品に特有な現われ方があるのである」。

まず、ここで論者が引用しているのは、周知の『資本論』第一巻第一章の価値の量的規定についての敘述の中からとってきたものであるが、この引用文について、ここで論者が「……というのも、その意味である」と説明しているのは完全な誤りである。マルクスは価値の大きさが労働の分量によって規定されることを述べ、ついで、この労働時間による価値規定について誤解の生じるのをあらかじめ防ぐために、「もし一商品の価値が、その商品の生産中に支出される労働の分量によって規定されるとすれば、ある人が怠惰であるか不熟練であればあるほど、彼はその商品の仕上げにそれだけ多くの時間を要するというわけで、彼の商品はそれだけ価値が多いか見えましょう。けれども、諸価値の実体をなす労働は、同等な人間の労働であり、同じ人間の労働力の支出である」と述べて、その労働の質が「社会的平均的な」ものでなければならないことを強調して、これに引用文の説明をつづけているのである。個人にとって「平均的に要する労働時間」ではなくて「社会的に必要な」労働時間が問題であるかぎり、その労働の質が当然に等質のものでなければならないこと、この質は当然に「社会的平均的」なものに求められなければならないことは、およそ無数の私的個人的生産者から成り立つ社会における生産を考えてみただけでもあきらかなところである。この等質のものとして、はじめて個人的労働時間は社会的意義をもつことができ、また「社会的な必要労働時間」として社会的に通用しうる——そしてまた、通用しなければならない——のである。

ここで、論者が「ロビンソンの場合のように『一個同一なる人間の労働力』ではないが、斯かるものと『看做され

る』のである」と説明しているのは、まさに「語るに落つる」部類といふべきである。「商品生産社会での無数の個人的労働力」が「ロビンソンの場合のように『一個、同一なる人間の労働力』でない」ことは、「無数の」と「一個」という二つの語を並べてみただけでもあきらかである。だが、問題は、その無数の個人的労働力が同じ質のものとして、同一なる人間労働力としてはじめて価値の量的規定を決定するものとなりうるし、またそういうものにならねばならぬということである。ここでは、等質の「一個同一の人間の労働力として意義をもつ」し、また意義をもたねばならぬことが、明確に説かれているのである。それは、この論者がつけたしているように、「斯かるものと『見做される』」<sup>(19)</sup>などといったものではけつしてない。

(19) この論者は、些細な言葉にも独特の特異な解釈を与えなければおかないといった傾きがあるにもかかわらず、ここでマルクスがはっきり「意義をもつ」「妥当する」(gelten)と述べている箇所を、旧訳高島訳をそのままとって「見做される」としているのは、まことに面白い現象といわなければならない。このような、あきらかな誤訳をしも採用しなければならないというのは、おそらくは、例の「社会的なるものへの転化」という当り前でない主張をどうしても裏付けようとの熱意と必要とによるものと思われるのである。

マルクスからの引用文の真意をごく当り前にくみとれば、この論者が最後に「そこに商品に特有な現われ方があるのである」などと述べたてていることが、まったくのこじつけであることは、いまさらいうまでもないところである。マルクスの説いているのは、価値の量的規定であり、そこにおける労働そのものの質的規定である。この「社会的平均的」という質は、およそ個人ではなく社会が問題となるかぎり、どの社会においても社会的労働について決定的な意義をもつべきものであって、この質的規定そのものにはならぬ「商品に特有な現われ方」はないのである。商品社会に特有なことは、ただその「社会的平均的労働力への還元」がどのようにしておこなわれるか、またその

「還元」がどのような社会的意味をもつかという点にあるのである。

つぎに、第二パラグラフについては、きわめて短いので全文をかかげてみよう。

「マルクスが『資本論』第一巻第一章第二節で明かにしている「商品に表現せられた労働の二重性」も、したがって此の観点から理解しなければならない。それは単純に所謂有用労働と抽象的な人間労働との二面の対比としてではなく、寧ろ此の二面が商品生産に於いて特殊な形を採って対立的なものとしてあらわれる點に注意しなければならない。」

まず、この「したがって」という言葉に注意されたい。第一のパラグラフで述べられているのは、要するに個人にとつての「平均的に要する労働時間」と社会にとつての「平均的に必要な労働時間」との内容の比較であつて、そこには、なんら「労働の二重性」についてふれたものはない。また「此の観点」といっても、要するに個人的なものから社会的なものへ観点が移つただけのことで、しいていえば、「社会的観点」というだけのことである。それゆゑ、右の「したがって」というのは、例によつて例のごとき論法のひとつでまつたく無意味な飾り文句といふのほかにない。あとの文章についても、この種の誘導的な飾り文句はすくなく挿入されているのであつて、たとえば、「労働の二重性」についてこれを「単純に……の二面の対比として」というくだりにもこれがあらわれている。いったい、マルクスによつて詳細に展開されている「労働の二重性」についての叙述を読んで、これを「単純に……の二面の対比」として理解し、とらえているような研究者があるだろうか？　ところで、この論者は、「此の二面が商品生産に於いて特殊の形を採つて対立的なものとしてあらわれる點に注意しなければならない」と、われわれに教えている。われわれは、別してこの文章はなかなか傾聴に値するものがある「點に注意しなければならない」。この文章はつ

ぎのことを教えているのである。

すなわち、まず、「有用労働と抽象的な人間労働との二面」が「あらわれ、」ところが問題である、つまり、二面そのものの意義、内容は問題ではなく、単純に、「あらわれ方」だけをこの論者はとりあげるのである。つぎに、この二面が「あらわれる」ときの「あらわれ方」が「特殊の形を採って対立的なものとして」あらわれる点が問題だといふのである。この「特殊な形を採って」あらわれるということ、「対立的なものとして」あらわれるということについて、論者はつぎの第三パラグラフ以下で説明を展開しているのであって、われわれはその説明について、「特殊な形をとって」「対立的なものとして」あらわれるという「あらわれ方」とは、いったい、どんなものか、ということをも具体的にみてみることにしよう。それによって、そういう「あらわれ方」だけを問題とすることの意義も、同時にはつきりとつかまれるはずである。

第三パラグラフについて。われわれはこれを三つに分けて考察してみよう。

①「元来商品の使用価値は、商品の生産者乃至所有者にとつての使用価値ではない。したがって使用価値を生産するものとしての労働自身が己にロビンソンの場合とは異った性質を有するものとも云えるのである。その有用労働は、商品に於いては抽象的人間労働とそのまま結合せられたものとしてではなく、寧ろ同じ労働が、一面では己に他人の為めの有用労働として、他面では他人の有用労働に於いて実現せらるべき自己の人間の労働として、互に対立的な関係にあり乍ら統一せられたものになって居る。極言すれば有用労働自身は、その労働の担当者にとっては直接関心をもつたものとは云えないものとしてあらわれるのである。」

たんに商品にかぎらず一般に労働生産物についてみて、およそ一つの社会での生産が問題となるかぎり、その労働

生産物の使用価値が、その労働生産物の生産者にとっての使用価値でないのは当然であって、そのことは、要するに、社会的分業がおこなわれているということの別様の表現にすぎないのである。このように、社会的分業のもとでは労働生産物の使用価値は当の生産者にとっての使用価値ではありえないということ根拠として、「したがって、使用価値を生産するものとしての労働自身が己にロビンソンの場合とは異った性質を有する」というように主張するのは、まったく誤りであり、きわめて混乱した推論様式を示すものである。ロビンソンの場合には各種の労働が同じか個人によってとりおこなわれ、したがって、そこでは社会的分業のもとで多数の生産者によっておこなわれる労働がいわばひとり人間の中间によせあつめられているようなものである。したがって、「使用価値を生産するものとしての労働自身」についていえば、同一の個人がおこなうか多数の人間が分業しておこなうかのちがいがあただけであって、その「労働自身」にはなんら変りはない。ここでも、この論者が、「個人的」と「社会的」との関係を正当にとらえることができないこと、誤った先入主をもってこれを曲解していることは、あきらかである。また、別の観点からみれば、「異った性格」は、私的労働の「私的」という点にその根拠を求めべきであるのに、この論者の眼から、この決定的に重要な「性質」が脱落しているという点が、重大な意味をもっているといわなければならない。だが、ここで決定的な意義をもっているのは、そのつぎの文章である。

まず、「その有用労働は、商品に於いては抽象的人間労働とそのまま結合せられたものとしてではない」という、論者の主張は、まったく誤りであり、労働の二面性についての混乱した解釈を示すものである。およそ労働生産物を生産する労働にして、「抽象的人間労働とそのまま結合せられたもの」でないような「有用労働」は、ありえない。だが、この自明の「二面性」という事実をこの論者に見失わせたのは、つぎの、まことに奇妙な「対立的関係」なるも

のである。すなわち、論者はここで「労働の二面性」についてまったく斬新な独自の見解をうちだし、その「一面」は「他人のための有用労働」、その「他面」は「他人の有用労働において実現せられるべき自己の人間の労働」だと定式化し、この二面が「対立的な関係」にあると主張しているのである。このような「二面」のとらえ方は、はたして正しいものといえるであろうか？ 一見すると、右の主張は正しいもののように見える、そしてまたこういう見せかけをつくるために、この論者は例によってこまかい文字の配りようをしているのである。右の「二面」なるものは、要するに一方の「有用労働」と他方の「人間の労働」との両者の上に、それぞれ「他人のための」と「自己の」という「限定」をつけ、この「限定」そのものが「互に対立的な関係」にあるから、「労働の二面」すなわち「有用労働」と「人間の労働」とが「互に対立的な関係」にあるのだ、という筋書きでできあがっているものなのである。<sup>(20)</sup>そこで、右の「限定」について、いささかみてみよう。

(20) さきに、この論者が、「単純に……二面の対比として」とらえてはならぬとさとしていたのは、要するに、こうした「限定」をつけたして「対立的関係」にあるものとしてとらえねばならぬということの前ぶれであったのである。

はじめの「一面」つまり「有用労働」について「他人のための」という「限定」がついているのは、さきに述べたように、なにも商品生産社会に限ったことではなく、およそ社会的分業にもとづく社会ではどこでも一般的に妥当すべきことである。この「他人のための」ということは、要するに「社会的な使用価値」をつくりだすものということの別様の表現にすぎないのであって、「自己の」に対立する概念などではありえない。もっとも手のこんだところは、「他面」にくっつけられた「他人の有用労働に於いて実現せられるべき」という「形容句」である。いったい、「他人の有用労働において実現せられる人間の労働」とは、どんなことを意味しうるであろうか？

まず、「他人の有用労働」という言葉そのものが、誤りであり、錯乱を示すものである。論者が云おうとしているのは、自己の労働生産物 $\parallel$ 商品を他人の生産物 $\parallel$ 商品と交換することであろう。このばあい、「実現」される——（この「実現」という言葉の使い方の誤りと混乱はしばらくおいて）——のは、他人の労働生産物 $\parallel$ 商品においてであって、他人の有用労働などではない。このように、それが「実現される」のが他人の「有用労働」ではなくて他人の「労働生産物 $\parallel$ 商品」であることを、いいかえれば、「有用労働」と「労働生産物 $\parallel$ 商品」との根本的なちがいを、明確にとらえることは、決定的な意義をもつものである。この両者を混同して「商品に特有な現われ方」など、わかったものではないのである。ところで、「他人の有用労働に於いて実現される」ということは、右にみたように、たんに「他人の労働生産物 $\parallel$ 商品と交換される」ということである。だが、「他人の労働生産物 $\parallel$ 商品と交換されるべき」ものは、「自己の労働生産物」であり、「自己の労働」すなわち「自己の有用労働と自己の人間的労働との二面をあわせもつ自己の労働」の生産物であり、したがって、このような「二面」をもつ「自己の労働」こそ論者のいう「他人の有用労働に於いて実現せられるべき」ものである。このことは、論者のいう「実現」という言葉ひとつについて考えてみただけでも明瞭である。「実現されるかされないか」を決定するのは、自己の労働の「二面」のうち、まさしく「有用的労働」の一面であって、自己の「人間的労働」などではない。「他人のための使用価値」つまり「社会的使用価値」をもつかどうか、いいかえれば、「他人のための有用労働」として妥当するか否かが、「実現」を決定する。この点からみれば、むしろ「他人の有用労働に於いて実現せられるべき自己の有用労働」と改めた方が、より整然たるものとなるのである。要するに、——明白な国語的錯乱をのぞけば——この論者が、「労働の二面性」について、その意義と内容をままたく理解することなしに、たんに、「単純に所謂有用労働と抽



象の人間労働との二面の対比として」、「それもたゞ言葉の上でだけの「並列」としてとらえているにすぎないことは、うたがう余地がないほど明瞭である。このような誤解と錯乱との「統一せられた」見地からみれば、労働の「対象化」形態が当面決定的な意義をもつものであることが見落されるのは理の当然であって、この「対象化」形態の意義と内容を明確に把握することなしには、「対立的な関係」など上の空になってしまうのも、また当然なのである。ところが、さらにこの論者の論理一貫性の完全な缺如を示すものが、つぎの「極言すれば」という「飾り文句」にはじまる一文なのである。「極言すれば」という言葉は、さきに述べたところと同じ内容のことを強めて、あるいは、その主張を極端な形で示せば、ということであって、さきに述べたところと同じ事柄をつぎに述べるのでなければ用いるべきものではない。ところで、さきの文章と、「極言すれば」以下の文章と、はたして同じ内容のことを云っているであろうか？ それらがまったく別の内容のことを、「極言すれば」正反対のことを述べているということは、一見してあきらかではあるまいか？ この論者は、例によって例のごとく、さきの文章の「他人のための有用労働」という文字を、あとの文章では「有用労働自身」と書きかえ、「他人のための」ものであるから「その労働の担当者にとっては直接関心をもったものとはいえないもの」というように、言葉の上で操作をこころみたまものである。だが、この論者にとってはまことにお気の毒なことに、「他人のための有用労働」であるか否かによって、いいかえれば、「社会的な使用価値」をもつか否かによって、「自己の人間の労働」が「他人の有用労働に於いて実現せられる」か否かが決定されるのである。だから、そのような決定的意義をもつ「有用労働自身」が「その労働の担当者にとって直接かつ重大な関心をもつたもの」でなければならぬことは、いうまでもない。つまり、この論者は、さきの文章で自分自身が述べたてていることの論理の意味がわけわからず、あとの文章では「極言すれば」などという飾り文句

で、まったくあべこべのことを平気で並べたてているのである。これによって、この論者が、さきの文章で「互に対立的な関係にありながら統一せられたものになっている」などと「弁証法的」表現をつかっているのは、まったくたぬにするおしやべりにすぎないということも、おのづから明白になってくるのである。(なお、この「有用労働」つまり「具体的労働」が「直接関心をもったものといえないものになる」という、事実とまったくあいられない特異な主張については、すでに前稿でも検討したので、ここでは、これ以上立ち回することをひかえておこう)。

②「ロビンソンの場合には彼れの労働時間の配分が『必要に迫られて』なされたのに反して、此処ではその有用労働への分業が『必要に迫まられて』なされるのである。『物が無用であれば、その内に含まれている労働も亦無用であり、それは労働としても数えられず、したがって又何等の価値をも形成しない』からである」。

まず、ここのはじめの文章をとくとごらんいただきたい。ちよつと見ると、「ロビンソンの場合」と「此処で」とどちらもまったくがいはいはないように思われるが、よくよく見てみると、この論者特有のこまかい手のこんだやり方で、両者の対比が——「のに反して」という言葉で——おこなわれていることに気がつくのである。「ロビンソンの場合」に「必要に迫られて」なされるのは「彼れの労働時間の配分」であり、「此処で」「必要に迫られて」なされるのは「その有用労働への分業」である。この論者は、おそらく、「ロビンソンの場合」には、「必要に迫られて」かれが「労働の担当者」としてその「人間的労働」と「有用労働」とを意識的におこなない、したがって、「有用労働」に「直接関心をもつ」てこれに意識的にかれ個人の「総労働時間の配分」をおこなったが、「此処」の商品生産社会では、各個人の労働の「有用労働への分業」はその個人にとって意識的におこなわれることなく、もっぱら外部から強制され、「必要に迫られて」なされるのだ、と云おうとしたものであろう。ところで、まず第一に、もし、「有用

労働への分業」が「必要に迫られて」なされ、したがって、どの種類の「有用労働」をおこなうかが当の個人にとって重大な意味をもっているとするれば、どうして、「有用労働」そのものが当の「労働の担当者にとって直接関心をもったものとは云えないもの」などといえるであろうか？ これによってみれば、この論者は、「必要に迫られて」という言葉の意味内容をすこしも考えてみないで、ただ並べたただけだということがはっきりするのである。第二に、右の文章は、「ロビンソンの場合」と「此処」つまり「商品生産社会」とを、いいかえれば、個人と社会との二つの場合を直接に比較対照しているものであって、後者の場合に「労働の担当者」個人を引入れることは、文章の性質上まったく許されない。右の文章そのものは、二つの場合が、たんに「個人的」と「社会的」とのちがいにどまり、事柄の内容そのものはまったく同じだということを示すものにほかならない。このことは、その内容をより正確に示す言葉を一、二申しそえるだけで明白である。——曰く、「ロビンソンの場合には、彼れ個人の総労働時間の各有用労働への配分が、二申しそえるだけで明白である。——曰く、「ロビンソンの場合には、彼れ個人の総労働時間の各有用労働への配分が、彼れ個人の生存の必要に迫られて、此処では、社会の総労働時間の各有用労働への配分が、社会の存続の必要に迫られて、おこなわれる」と。つまり、どちらも、「総労働時間の各有用労働への配分」が「存続の必要に迫られて」おこなわれるのは、まったく同じであつて、これはもとより当然のことなのである。ここで、後者の場合について、「その」などというアイマイ模糊たる代名詞をつかつて、「労働の担当者」個人をもちこんだり、またそれによって「必要に迫られて」という言葉の内容にまったくちがったものをむりやりもちこんだりすることは、論理の上から云つても、はたまたたんに国語的にみてすら、まったく許されない。第三に、肝腎なことは、この論者が、「ロビンソンの場合」と「商品生産社会」とのあいだの個人的労働そのものの本質的差違について、いいかえれば、私的労働と社会的労働との関連について、まったくこれを気づくことすらしていないという、根本的な欠陥が、

ここで大きな意味をもっているということである。要するに、さきに挙げた論理的、国語的錯乱と誤謬は、いづれも、此の根本的な欠陥に結びつけて、理解されるべきものなのである。

右の第二の文章は、『資本論』第一巻第一章第一節の末尾におかれた周知の命題に、「からである」という言葉を附けたしてできている。したがって、この論者がこのマルクスの命題をばさきの「有用労働への分業が『必要に迫られて』なされる」ことの「理由づけ」となりうると考えていることがわかる。だが、ここでもまたまたお気の毒なことに、こういう文章は、この論者の救いがたい混乱と曲解とをますます示すばかりのものとなりうるだけなのである。マルクスは、右の命題のすぐ前に、「最後に、いかなる物も、使用対象であることなしに価値ではありえない」（前出四五ページ、訳①—二三ページ、傍点—マルクス）ということ述べ、これによって、「使用価値と価値」とが「商品の二要因」であることを説明するためにとくに附け加えられた第一節最後のパラグラフの結びとなしている。この「使用対象である」ということは、要するに「人間ならびに社会の存続を支えるもの」としての労働生産物一般に共通の「要件」であって、このことなしには、およそ労働生産物たりえない。「使用対象である」ことのないようなものは、このばあい、人間ならびに社会にとってなんらの意味をももたない。これはむしろ問題以前の問題である。ところが、「有用労働への分業」という言葉そのものが示しているのは、「使用対象である」もの、「無用でない」、つまり有用な」ものをつくりだす労働であって、ここでのマルクスのとりあげている命題とさらさら関係のないものだけということは、あまりにも明白である。また、さらに、「有用労働への分業が『必要に迫られて』なされる」場合をすこしでもたちらって考えてみるならば、それは、要するに、「社会的需要との関係において交換価値いかえれば価格がその商品価値以上または以下になることによって」なされるということであって、もとよりその商品が使用価値

をもつことはひとつの前提要件となっているのである。「物が有用であり、使用価値をもっており、価値もりっぱにもっている」商品について、ただ、その社会的供給量が社会的需要量を上廻るときには、その価格が価値以下に下るといふことを——「必要に迫られて」という飾り文句で——述べていながら、これを「物が無用であり、なんらの価値をもたないもの」についての説明で「理由づける」とは、なんと恐れいった論法ではあるまいか！「有用労働自身は、その労働の担当者自身にとって直接関心をもったものとは云えないものになる」などという、愚にもつかぬ屁理窟を考えついて、これをなんとか云いくるめることに心をとらわれていることが、このような見えすいた錯乱とこじつけを必然的に生みだすことになっている。

さて、第四パラグラフの内容は、その最後の文章によく示されているように、「商品に於いては」その使用価値は「他人のための」いいかえれば「社会的な」ものだということをくりかえしただけのものである。このことは——さきに見たように——たんに、社会的分業ということの別様の表現にすぎないものを誤ってとらえようとしていることを示すだけのものであって、ここでくりかえしとりあげるまでもないことである。そこで、これを略して、つぎにうつらう。

第五パラグラフは、「有用労働がその労働の担い手にとって直接関心をもたない」ということを説いた前半と、「社会的必要労働時間」について説明した後半との、二つの部分から成り立っている。

①「直接の生産者自身にとっては、事実上有用労働としての個々の具体的生産活動に従事し乍ら、それが裁縫労働であるか、機械労働であるかは問題ではない。それは丁度『同一の人間が裁縫したり、機械したりして、この二つの労働の方法が同一個人の労働の変形に過ぎない』ものとして、何れにも同一の人間労働が支出されたと考えられるの

と同じ事を、社会的に行うのである。現に『資本主義社会では、労働需要の方向の変化に従って、人間労働の一部分が、或る時は裁縫の形で、或る時は機械の形で供給せられている』。それは生産者自身にとっては、その生産活動が、己にその具体的形態を捨象した形であらわれて居ることを示すのである」。

まず、第一の文章は、例によってまったく誤りであり、事実とも、論者自身の主張とも、真つ向うから対立するものである。なぜなら、直接の生産者自身にとっては、かれの「人間的労働」がどれだけの「他人の有用労働に於いて実現せられる」かは、その有用労働の具体的形態そのものがこれを決定し、したがってかれ自身、「その有用労働への分業」を「必要に迫られて」重大な「問題」とせざるをえないからであり、この「必要に迫られて」の重大関心という動かしがたい事実は、誰の目からみても「問題ではない」からである。これにつづいて、論者は、例によって、『資本論』第一巻第一章第二節の中から引用をかかげて、きわめて注目に値する文章を構成している。いま、右の引用文を削ってみると、こうである。——曰く、「それは、何れにも同一の人間労働が支出されたと考えられるのと同じ事を、社会的に行うのである」。

この文章は、いったい、どんなことを意味しうるものであろうか？　まず、例によって、「それ」がなにを指すか？　「それは……：行うのである」という日本語の意味を考えつくことができる者は、けだし、この論者をおいてこの世にいないであらう。だが、この「それ」がすくなくとも、その前の第一の文章に直接関係したものであり、したがって、この「それは」、「直接的生産者個人」が「具体的有用労働」を行うことを指しているものであることは、ほほうたがいないであらう。ところで、「生産者個人が個人的に、具体的労働を行うこと」||「それは」…社会的に行うのである」とは、いったい、なんということであらうか？　また「何れにも同一の人間労働が支出されたと考えられるのと

同じ事」という、もってまわった表現も傑作である。右のマルクスからの引用文は、うたがいがもなく、「何れにも同一の人間労働が支出されている」ことを端的に述べているものである。いったい、「支出されたと考えられるのと同じ事」とは、「支出されている」ことなのか、「支出されている」こととは別のことを指すのか？ しかも、第一文章も、これを好意的にうけとれば、「同一の人間労働が支出されている」のだから、そのかぎりでは、具体的形態は「問題ではない」といえるものと解されるのであって、すでに第一の文章そのものが、「何れにも同一の人間労働の支出がおこなわれる」こと、それもかれ個人が個人的にその「支出」をおこなうことを明示している。それなのに、なにをいまさら、「それ」は「支出されたと考えられるのと同じ事」を、しかも「社会的に行うのである」などと云う必要があるのか？ いったい、直接的生産者は、いつ、どうして、「社会的に行う」ことができるようになったのか？

このくだりは、まさに、この論者の論理構成の唯一の武器たるアイマイさ、ルーズさと、例によって例のごとき論理的ならびに国語的錯乱とをあわせ示すものとして、恰好の一範例たるを失わない。この論者は、右の迷論を裏づけるべく、さらに「現に」などという、もっともらしい言葉をその頭にくっつけてさきの引用文のある同じパラグラフからマルクスの文章を引いてかかっているが、このマルクスの文章は、その最初の「資本主義社会」という文字が明示しているように、社会的総労働についての説明であって、「直接の生産者自身」など問題とするものではない。だから、「現に」という言葉でこの文章を裏付けにつかっているということは、「個人的に行う」ことを「社会的に行う」と見誤るような錯乱の見地にとってのみ、可能なことではあるのである。

ところで、右の錯乱の見地は、それなりに一貫してつらぬかれずにはいない。マルクスの「社会的総労働」にかんする右の文章にすぐつついて、この論者は問題をまただろ「生産者自身にとって」の問題にすりかえ、しかもその内

容は、マルクスが「社会的総労働」について述べたことをそのままつぎはぎするという、手ぎわを見せている。そも、**「生産者自身にとって、かれ自身の生産活動が、すでに——よくききたまえ、すでに、だそうだ！——その具体的形態を捨象した形であらわれている」**などというのは、愚にもつかぬタワ言でしかない、マルクスの云っているのは、社会的見地からすれば、同じ人間の労働が、ことなつた**「具体的形態をとってあらわれている——そしてまた、そういう具体的諸形態をとってあらわれねばならない——**ということである。ところが、この論者はつぎのようにこれを全部ひっくり返してしまう。まず、右の社会的見地を生産者そのひとの個人的見地にひっくりかえす。「**人間の労働**」をどちらともつかない「**生産活動**」におきかえる。「**具体的形態をとってあらわれる**」というのを、「**はやくも具体的形態を捨象してしまつてあらわれる**」というようにひっくりかえす。こういうたぐいの人間を、むかしのひとは、まことに適切にも、「**わけわからず屋**」と云つたものである。そのわからずやのほどは「**具体的形態を捨象した形であらわれる**」という、一句でおしはかることができるほどのものである。こういうタワ言を並べたてうということは、まことに驚異というほかないが、きわめて同情的に考えれば、例の「**生産者個人にとって具体的労働は直接関心をもちえない**」という奇妙な先入主にあまりにもふかくとらわれたためとも推量されるのである。

②「**勿論、此等の生産者の労働は、それが為めに直ちに社会的な労働となるわけではない。その人間の労働の支出は、依然としてその生産者自身の個別的なるものに過ぎないのであって、彼の労働の五時間が、直ちに社会的にも五時間の間人間労働の支出と認められるわけではない。云い換えれば、商品の価値を形成する労働は、そのままに比較計量せられるわけにはいかないのである。それは『個人的労働力の各々が、社会的平均労働力の性質を有し、且つ又斯かる社会的平均労働力として作用し、したがって又一商品の生産にも、平均的に必要な、即ち社会的に必要な労働時間を**



要するに過ぎない場合に限って他のものと同じように同一の人間の労働力』とせられる外はないのであって、社会的過程を通して始めて計量せられ得るものとなるのである」。

まず、はじめの「それが為めに」という言葉の「それ」がなにを指すか、例によってこのルーズな用語の意味を推量するよりほかないが、これはおそらく、「具体的形態を捨象した形であらわれて居る」ことであって、いいかえれば、「同一の人間労働の支出」ということであろう。ところで、ここにただちに問題となるのは、ここで指示されている「社会的労働」という言葉の内容である。この論者は、生産者個人の労働が「具体的形態を捨象した形で」つまり「同じ抽象的人間労働として」あるいは「同じ人間の労働力の支出一般として」「あらわれている」としても、それでは「ただちに社会的な労働となるわけではない」と主張している。では、どうなのか？ と云えば、この論者は、「その人間の労働の支出は、依然としてその生産者自身の個別的なものに過ぎない」と答える。いったい、こういう「社会的な労働」と「個別的なるもの」との対比のしかたは、正しいものといえるであろうか？ それが、まったくまちがっており、錯乱した論法だということは、あきらかである。「社会的な労働となる」ことが問題となるのは、まさに「私的労働の社会的労働への生成」の問題においてであって、このことは、まさに本節(一)において説明したように、同じ「人間の労働力の支出」すなわち「抽象的人間の労働」という資格においてはじめて「社会的な労働になる」のであり、しかもそのことを実証するのは、ほかならぬ商品の交換過程なのである。簡単にいえば、「私的労働が社会的な労働と成る (werden)」のは、まさに「具体的形態を捨象した形であられる」ことによってである。この論者は、このことをまったく理解できず、あべこべのことを——言葉の上では——主張しているのである。だが、事実上は右の「私的労働の社会的労働への生成」などは、はじめから——つまり、「社会的な労働となるわけ

はない」などという文字を並べているときにすでに——問題となりえなかつたものである。右につづく文章を一読しただけでわかるように、この論者が「社会的な労働」と云っているのは、実は、「社会的に必要な労働時間」のことであつて、ここでもっぱらとりあげているのは、「個別的な労働時間の社会的必要労働時間への還元」の問題にすぎない。だが、いうまでもなく、このように「労働時間」が問題となるのは、「社会的な労働」という同一の質的規定があきらかにされた上でのことではなければならぬ。ところが、ごらんのように、こうした当然の論理的手続きも思いつくことなく、この論者は、「社会的必要労働時間」の問題を「社会的な労働」の問題だととりちがえて、「社会的な労働」の規定ののちに論すべき「労働時間」の規定をいきなりここにもちこんだものである。「労働」と「労働時間」とをとりちがえるとは、まさに、この論者ならでは、というところである。

最後に、第六パラグラフについて。

①「要するに商品生産をなす労働は、その労働の有用労働と抽象労働との二面を、私的労働と社会的労働との二重性としての対立に転化するのである」。

「要するに」という言葉は、これまでの説明を要約すれば、ということの意味する。そこで、この論者のこれまでの議論の中味に照らして、ここでの主張の意味するところを具体的にいいあらわすと、つぎのようになるであろう。すなわち、「商品生産をなす労働」では、「有用労働」の一面は「他人のための有用労働」として「社会的労働」に、「抽象的労働」の一面は「他人の有用労働において実現せられるべき自己の人間の労働」として「私的労働」に、かくして、「有用労働と抽象労働との二面」は、「私的労働と社会的労働」という「互に対立的関係にありながら統一せられたもの」に、つまり、「私的労働と社会的労働との二重性としての対立」に「転化する」のである。と。ごらん

のように、ここに述べられている本当の意味というのは、——ありとあらゆる錯乱と曲解とタワ言をのぞけば——たんに、商品の使用価値は「他人のための使用価値」つまり「社会的使用価値」である、ということだけである。なお、ここでひとつ注目に値するのは、「二重性としての対立に転化する」という、なんともいいようのない絶妙な「弁証法的」表現である。まず、「二面を二重性としての対立に転化する」などというのは、時間的観念の欠如を示すものである。商品生産社会において、その社会でおこなわれる個人的労働は、そのそもそものはじめから、すでにすべて私的労働であり、しかも同時にそれが社会を支えるものとして社会的労働であらねばならぬ。いまさら「転化する」ものなど、ありようはない。さらに、「二面が対立に転化する」という言葉が該当するものは、「私的労働と社会的労働」ではなくて、「使用価値と価値」でなければならぬ。そもそも、「私的労働と社会的労働との二重性」などという言葉そのものが、誤りである。このくだりを、正常な論理にしたがって整理すれば、つぎのようになるであろう。——曰く、「有用労働と抽象労働との二面をもつ私的労働は、その抽象的人間的労働という共通の資格において社会的労働に成り、この抽象的労働の対象化したものが商品の価値として、有用労働の結果はその使用価値として、つまり、商品の中にふくまれた価値と使用価値との対立としてあらわれる」と。

要するに、この論者には、私的労働とはどういうことか、それがどういう意味において社会的労働となるのかという、私的労働の社会的性格というものが全然わからないし、労働の二面性の内容も、対立という言葉の簡単な意味も、さっぱりわけわからず、ただ言葉の上でだけつじつまを合せることに、つまり語呂合せだけにあらゆる智慧と術策と引用をつくしているということがますますはつきりするのである。

② 「したがってマルクスが『あらゆる労働は、一方では、生理的意味における人間労働力の支出であり、又此の

等一なる、人間的なる、即ち抽象的人間労働という性質に於いて商品価値を形成する。有らゆる労働は、他方では、目的の一定した、特殊の形態における人間労働力の支出であり、又此の具体的なる、有用労働の性質に於いて使用価値を生産する』という時、吾々は之を単純に『抽象的人間労働』と『具体的なる有用労働』との二重性と解してしまつてよいとは云えない。マルクスにとつても、前者が商品価値を形成するものとしてあらわれる点にその意義があつたものと認めなければならない。

マルクスは、はっきりと「労働の一面たる抽象的人間的労働が商品価値を形成し、他の一面たる具体的有用的労働が使用価値を生産する」と述べているのであつて、このマルクスの文章をば「単純に抽象的人間労働と具体的有用労働との二重性と解してしまふ」ようなタワケがどこにあるであらうか？ いまさら、「之を単純に……二重性と解してしまつてよいとは云えない」などと述べたところ、その御当人の誤読癖をさらけただけで、なんの足しになるのか？ 「マルクスにとつても」ではなく、マルクスは明確に「抽象的人間的労働が商品価値を形成する」と述べているのであつて、かれは、「前者が商品価値を形成し、後者が使用価値を生産する」ということ自体の意義を強調しているのである。これをマルクスは前者が価値を形成するという一面だけについてその意義を述べているとか、あるいは、この論者のように「それが商品価値を形成するものとしてあらわれる」と述べているとか云うのは、まったく度しがたいこじつけといわなければならない。この「としてあらわれる」などという、もっともらしい付け足しそのものが、かえつて、この論者が価値形成の内容について、とくに「労働の対象化」について、まったくわけわからずであるということの動かしがたい証左となるばかりである。

③ 「それと同時に使用価値を生産する有用労働も単なる有用労働とは云えないものになつて来るものと理解され

るのである」。

ここでこの論者が「単なる有用労働とは云えないもの」というのは、さきに第三パラグラフの①においてすでに検討済みの、「他人のための有用労働」、「その労働の担当者にとっては直接関心をもったものとは云えないもの」としてあらわれる有用労働」のことであって、いまさらここでその中味のほどを吟味するまでもないが、しかしこの論者がいかにその論理的思考能力の欠如をかえって文章作成の唯一の手段としているかということ、右の文章について検討しておくことは、当面有益なことであろう。この論者は云う、——「使用価値を生産する有用労働は単なる有用労働とは云えないものになって来る」と。この「使用価値」とは、いうまでもなく、「商品の使用価値」である。ところで、「商品の使用価値を生産する有用労働」が「単なる有用労働」ではないことは、読んで字のとおりである。その有用労働は、はじめから「単なる有用労働ではないのだ。だから、いまさら「単なる有用労働とは云えないもの」になって来る」ようなものではない。それは、もともと「単なる有用労働」ではなく「商品の使用価値を生産する有用労働」であり、「社会的使用価値を生産する、他人のための有用労働」であるのだ。だから、右のもっともらしい③の文章は、要するに、「商品の使用価値を生産する有用労働は、社会的使用価値を生産する有用労働である」という、この上もなくはつきりした、だが、およそ無意味なトウトロギーであることがわかる。それと同時に、この論者の文章作成の手だてもあまり適切なもの「とは云えないものになって来るものと理解されるのである」！

この第六パラグラフの最後の文章において、この論者がふたたび「商品生産に於けるような対抗的性質」という、もっともらしい言葉を並べているとしても、すでにこれまでの検討を通じてその中味のほどを熟知しているわれわれにとっては、もはやこの言葉をあげつらうまでのこともないであろう。

要するに、これまでの検討によつて、——この論者特有の論理的錯乱と曲解を一応度外視しても、——すでに「商品生産における労働の二面性」と「私的労働の社会的性格」についての完全な没理解が右の諸文章をはじめつくりだしていること、このことはまた、とくに「労働の対象化」について、その価値理論における決定的意義にもかかわらず、文字の上でふれることすらなされていないという注目すべき事実と必然的関連をもつものであるということ、が知られるのである。この「労働の対象化」については、節を改めて論究することにしよう。